インタビュー

無駄なムダと無駄でないムダがある。

京都大学教授　川上浩司さんに聞く

実は身近な「不便益」

――川上さんが研究されている「不便益」とは何でしょうか？

わかりやすい具体例は、子どもが学校の帰り道でアスファルトの白線しか歩いてはいけないって遊びをやりますよね。そんな不便なルールを自分に課すのはまったくムダです。でも、あえて自分を不便にして、下校という行為を楽しんでしまうわけです。

そもそも「不便益」という言葉を発明したのは、恩師の片井修先生（京都大学名誉教授）です。あるとき、先生が「これからは不便益の時代だ」と突然言われて、いったい何だろうと思いましたが、話を聞いてみると「なるほど、これは研究になるな」と。それで課題を引き継ぎました。

人間と機械の関係を考える「人間機械系」という研究分野があり、たとえば、人間の代わりに機械が何かをやってくれるのは「代替型」と言います。自動化、高機能化など、便利さや効率が追求されるあり方です。でも、他にもいろんなモノとの付き合い方があります。普通なら手間がかかることは「不便」とされますが、そこにも何らかの「益」があるのではないか。片井先生の言い方だと「無駄なムダと無駄でないムダがある」。それを考えるための言葉が「不便益」です。

――不便益にはどんな良さがありますか？

必ずホームランを打てるバットとか、必ず入れ食いになる釣り具は便利で効率的かもしれませんが、面白くないと思いませんか？ そんな道具はまだ発明されていませんが、不便益という言葉を知らない方でも本能的に「何かおかしい」と感じるはず。そのバットでどれほどホームランを打っても単に道具のおかげでしかなく、「主体性をもつ」ことができません。私自身が世界に関わっている、自分ごとになっているという感覚がやはり人間には大事です。逆に自分ごとでないモノは不要だから、切り捨ててしまうでしょう。

自分が主体的にモノと関わっているとき、モノは身体の拡張になります。車の運転などがそうです。運転の手間をかけるから、自分の拡張として感じられます。でも、飛行機や電車は、移動手段として信用するしかないわけです。「モノを信じるしかない」の反対側、つまり、「手間をかけるから自分ごとになる」のは不便益の良さです。

「全ては〇〇である」のしんどさ

――便利／不便の実情は各個人で異なります。だから、「これは不便益だから」と誰かに押しつけると、場合によっては他者に不便の苦痛を強いることになってしまうかもしれません。

まず、モノづくりに関わる人は選択肢を用意すべきと思います。車で言えば、運転が好きな人には運転してもらえるように、運転が困難な人には自動運転を選べるように、それぞれオプションがあるといいですね。

また、先ほど白線だけを歩く遊びの例にふれましたが、先生から命令されてやっても楽しくないはずです。「自分でやってみよう」、「友だちとチャレンジしてみよう」、だから、面白い。つまり、不便益は自発的なものであって、誰かに強制されるものではありません。たとえば、「現在は不便で苦しいかもしれないけれど、未来に良いことがあるから我慢してね」という考え方が不便益だと言われると、すごく違和感があります。そうではなく、不便益はそれ自体で、現在を充実させる考え方だと思います。

――研究を進められるなかで、ご自身にはどんな変化がありましたか？

最初は崇高な哲学のように思った言葉ですが、いろんな事例を集めてみると、みんなが薄々わかっていることに不便益という名前をつけたのだなと考えるようになりました。

あと、科学者には「全ては〇〇である」と言いたい気持ちがあります。万有引力のようなものを見つけると論文が書けますから。ぼくも若い頃は「全て効率が良いほうがいい」と思いました。逆に「全ては無駄ではない」というのも、とても息苦しい考え方です。

でも、「無駄なムダと無駄でないムダがある」とわかると気が楽になります。これは研究というより歳を重ねたからかもしれませんが、私たちが「全ては」と言えることは本当にわずかだとだんだんわかってきました。きっと、「全ては」じゃない見極めに大事なことがあるのでしょうね。

かわかみ　ひろし

1964年生まれ。京都大学工学部卒業、同大学院工学研究科修士課程修了。博士（工学）。著書に『不便益のススメ：新しいデザインを求めて』（岩波ジュニア新書、2019年）など。自分を漢字一字にたとえると「吾唯足るを知る」の「唯」とのこと。「徹底的な効率化を否定する感じが不便益に通じる。それにユニーク（唯一）でありたいから」。

『不便益のススメ
――新しいデザインを求めて』
著者／川上浩司
発行／岩波ジュニア新書
定価／880円（税込）